

マイゾウ・メーノス（まあーまあー）の世界 ブラジル

ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久 記

## 第19話－政治家と国民（その2）

政策のいいかげんさには次の様なものがある。“プロ・アルコール政策”といって、ブラジルの砂糖キビの植え付けを増やし、アルコール精油所の増産で南部の経済救済を目的として、特別恩典を設けたアルコール車の生産奨励政策である。この名案も80年後半をピークに90年前半にはガソリンとアルコールの価格差が縮まり、アルコール車の経済メリットがなくなりアルコール車の販売が激減し、各自動車メーカーが生産を打ち切ってしまった。これも、“マイゾウ・メーノス”の世界であるブラジル政府の一貫した政策の欠如である。

＊（その後、フレックスエンジンが2005年頃から開発され、ガソリンとアルコールどちらでも使用できるようになり、2008年ではフレックス車が全体の85%を越えるようになり、今ではオートバイも含めてブラジルで生産される全ての車輛がフレックスエンジンとなってきている。）

“プロピーナ(袖の下)”と言われる賄賂が頻繁に発覚している。

“エスケーマ(手口、方法)”が暴かれることも頻繁である。

こんな間抜けな政府高官の恐喝がある、2000年5月のことである、パラ州に進出している日本の大手木材産業会社をなんやかんやと恐喝続けていた IBAMA(ブラジル環境再生資源院)の所長がブラジリア空港で賄賂50万リアルを受け取った所で逮捕となった。これは木材産業会社の勇断と警察とのコンビネーションプレーであった。報道の内容は(5月27日付けサンパウロ新聞に掲載)

ブラジルの日系木材産業会社を恐喝していたパラ州 IBAMA のパウロ・カステロ・ブランコ所長が、ブラジリア国際空港で、共犯者と見られる田中容疑者と共に逮捕された。当会社が恐喝された金額は150万リアル。パラ州 IBAMA の腐敗は甚だしく、現地からの要望でサルネイ・フィーリョ環境相は介入措置を取っており、同ブランコ所長の逮捕には、パラ州の検察、同州の連邦警察、ブラジリアの連邦警察が協力し

た。

当会社に対し、同ブランコ所長は昨年末から頻繁に恐喝を行っており、昨年12月に新聞紙上で報道されたように伐採禁止木材を納入したと仕組み、罰金をかけるなどと嫌がらせを続けていた。

こうしたことから、当会社では18日、同ブランコ所長の言葉を録音し証拠とすることにし、同社の原木植林部長が「贈賄するから罰金を帳消しにしてくれないか」ともちかけた。「これは、得たり」とブランコ所長が提示した金額は200万リアル。それお「きつい、150万リアルにしてくれ、そして3回払いで」と交渉。折衝の時間が長く会話が多ければ、それだけ証拠も多くとれるからである。当会社の対応にブランコ所長は原則的に同意、仲介者を使って原木植林部長と細かい交渉をさせ、24日の50万リアルをブラジル空港でブランコ所長の仲介者に手渡すと折衝がまとまった。

当会社側が渡す50万リアルの札束は、証拠となるように警察が全てコピーを取っていた。また、警察が当会社とブランコ所長の交渉を電話盗聴した録音には、ブランコ所長がブラジル高官の名前を出して威圧を試みていたことが明らかになっている。

24日、ブランコ所長は共犯の田中容疑者と共にベレン発264便に乗った。飛行機が夜、ブラジル国際空港に到着し、ブランコ所長が50万リアル入りの鞆を手にした瞬間、私服警官らによって逮捕された。

ブランコ所長は、30日にニューヨーク市に行き、ブラジルを代表して環境問題について発言することになっていた。

ブラジルには MST(モビメント・セン・テーハ“土地なし集団”)と言われる集団が非常に力を発揮し始め、各種の労働者シンジケート、労働党政党と結託して政府に対し強力な圧力をかけて来ている。民間の農場、国家管轄の土地に侵入し政府との交渉で土地を手に入れてしまうという、運動をいたる所で展開しており、農場の警備員、警察との発泡、乱闘騒ぎが後をたたない。

マナウスでも、いつも選挙の時期になるといたる所で、土地違法侵入問題が発生し始める。これはMSTとは別に、陰で政治家が貧困層を煽動して、所有者不明な土地、または市、州管轄の土地に侵入させ、立ち木を倒し、あっと結う間に、紙とビニー

ルを使った掘たて小屋を立ててしまい、陰で政治家を通して強引に正当化してしまうのである。これは、政治家の選挙の票集め目的の陰謀であり、バックに大きな力が働いているので被害に合ったら大変である。最近であると、マナウスの日系二世の青年達が地元日系人達と中心になって発足させた、マナウス・カントリー・クラブにゴルフ・コースがあるが、このロング・ホール5番コースの半分が一日にしてブルドーザーに侵入され、立ち木や芝を取られ、柵まで作られてしまった事件がある、陰には悪質な不動産屋と市議員動いているとのこと、今裁判で戦っているがどうなることやら。

(最終的にマナウス・カントリー・クラブの土地所有権が認められ、取り戻すことができたが、その裏には、大きな通りを作る政府のプロジェクトを察知し、分譲住宅地と名打って造成整地した後、政府に高額で買い取ってもらう魂胆があったのではなかったか)

もっと悲劇だったのは、リオ・デ・ジャネイロで発生したマンション・アパートの倒壊事件である。1998年カーニバルの時期にリオ・デ・ジャネイロのパラセ2号アパートが破壊し、8名死亡し「施行業者は危険を認知していた」として建設責任者のセルジオ・マイヤ元議員に逮捕令が1999年12月になって出された。何年も前から住民によって異常建設が指摘されていたにもかかわらず、ほっておいたため、アパートの一部が一夜にして倒壊してしまった。それで建築に使われていた砂が塩分を含んだ海岸の砂であることも判明し、危険建築物として、残りも爆薬で強制的に破壊されてしまった。建設会社の持ち主であり、連邦下院議員でもあるセルジオ・マイヤが議院調査委員会で諮問された後、議員を剥脱されたが、それにも関かかわらず、彼は被害者達に一銭の補償金を払う事もなく、自分が所有しているマイマミのホテルで友人を招待した年末のパーティーで、豪華なコップでシャンペンを飲んでいる姿がブラジルで全国ネットワークのテレビで放映された。

—次号 20 話へ続く—